

これまでに招いたのは **286人**

研修生116人 / 短期研修生80人 / ゲスト67人 / 国内研修生23人



設立の経緯：PHD協会は、1962年から約20年間ネパールで医療活動に従事した岩村昇医師が自らの経験と反省をふまえ、「物」「金」中心の一次的援助を超えた草の根レベルの人材交流・育成を提唱し、1981年に設立。

草の根の人々による村づくりへの協力

アジア・南太平洋の村の青年を研修生として日本に招き、農業、保健衛生、地域組織化などの研修を行い、帰国後もフォローアップを行うことを通じて、草の根の人々による村づくりと生活向上に協力します。

そこからわたしたちも行動する

日本の人々もアジア・南太平洋の人々との交流を通して学ぶことはたくさんあります。そこから、毎日の生活を問い直し、草の根の人々と共に生きることのできる生活を、足元から実践するための活動を続けています。

4月に来日した第33期研修生。1年間、各地で学びます。



サンティダエーさん
ミャンマー（ビルマ）/20歳

研修テーマ 有機農業、教育、保健衛生、協同組合
言語 ビルマ語
宗教 上座部仏教（テーラヴァーダ）

第2の都市マンダレーから車で約1時間離れた人口約2,700人のタダインシェ村出身。2013年度研修生モーママさんの従妹。

3人兄弟の長女で、しっかりもの。村では長女が家事を一手に担うことが多く、彼女も朝5時に起き、家族の朝食と昼食を作ることから一日が始まります。

家族で農業を営み、田んぼが約7万㎡、牛2頭。母が田植えの際の人集め等を手広くやっており、長女として後を継ぐ予定です。正直、農業がとても好きという訳ではないのですが、「大学を出ると皆農業をしない。農家の子どもでもある私たちがやらないといけない」と自分の道を歩む覚悟の強い女性。

大学を卒業後、モーママさんと一緒に英語等を子どもたちに教えており、「教えるのが好き」と教育にも強い関心を持っています。

シャフルル（通称：ゾン）さん
インドネシア /36歳

研修テーマ 有機農業、協同組合、住民組織化
言語 ミナン語、インドネシア語
宗教 イスラム教

タランバブンゴ地域カユジャングイ村から4人目の研修生。一昨年のダリスマンさんと同じ村の出身です。

娘3人に息子1人のお父さん。サトウキビを主とした農業や大工の仕事をしながら家族を養っており、自給用に魚の養殖もしています。農地が少なく、経済的な余裕があるわけではありませんが、村の治安を守る保安員や、マハットマーという健康体操を教える教室、子どもたちに道徳を教えるなど、ボランティア活動にも積極的です。

化学肥料や農薬の弊害には昔から関心があり、使用を極力避けています。しかし詳しい知識はなく、日本で勉強することを希望しています。他にも魚の養殖や家畜、日本の健康体操についても勉強し、カユジャングイ村の生活向上に役立てようとしています。

カンチ・マヤ・タマンさん
ネパール /27歳

研修テーマ 保健衛生、教育、協同組合、住民組織化
言語 タマン語、ネパール語
宗教 チベット仏教

首都カトマンズから南東にバスと徒歩で約4時間かかるタクレ村から初の研修生。昨年のムクさんとは同じ女性地位向上グループのメンバーです。

9人兄弟の末っ子。しかし他の兄弟は病気や事故で皆亡くなり、今は高齢のご両親との3人家族。近くで一人暮らしをしている叔母の世話を住み込みでしています。幼稚園と小学校で先生をし、一家を支えています。女性の地位が高いとは言えない中、農業グループの副代表、女性グループの会計など、多くのボランティア活動に従事しています。

「村には医者もいない、診療所もない。私が応急処置ぐらいできるようになり、お金がない人を診てあげたい」と語るカンチさん。日本では初等教育や保育、応急手当を含む保健衛生を中心に研修を受けます。